

コロナ禍における“集団的即興”

根 津 知佳子*

人と人が音楽を介して繋がる“音楽的場”は、意図や意志によって支えられている。音楽的場が安全・安心で、安定した枠（時間・空間）であってこそ、“創造的音楽活動”が可能になる。

コロナ禍においては、“創造的音楽活動”において最も重視される“身体性”“相互反応性”が奪われている。本稿では、N 幼稚園のお楽しみ会（クリスマス会）におけるプログラム構成の変容を概観し、そのプロセスにおける集団的即興の様相について報告する。

キーワード：集団的即興、創造的音楽活動、身体性、相互反応性、コロナ禍

1-1. “いまだかつてない” 創造的音楽活動

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、保育・教育現場における表現活動は、“三密”を理由とした自粛の対象となっている。実践現場では、行政レベルの対応の方向性が揺れ動く状況下であっても、管理職の裁量で保育・教育の質を担保しなければならない。子ども達の生活世界から、“歌うこと”“踊ること”“合奏すること”が排除されるというこの異常事態は、教員養成や保育者養成段階にかかる実習にも影響を与えている。そして、実践現場と高等教育機関との連携活動にも“いまだかつてない協働”が求められている。

筆者は、実践者と対象者が相互のパフォーマンスを認知すると同時に両者がパフォーマンスするという深層構造（図1 横矢印）を持つ“創造的音楽活動”の実践を重ねている。これは、作曲家である Nordoff, P. (1907-1976) と臨床家である Robbins, C. (1927-2011) によって創始された創造的音楽療法と、1990年代に我が国の言語臨床領域に広まった Bruner, J.S. (1915-2016) の言語獲得理論に依拠した長崎ら（1990）や千

田ら（1992）の研究を基盤としたものである。“創造的音楽活動”は、言語行為を支えるイナイナイバー遊びやフォーマット概念を非言語行為である音楽創造に援用している点を特徴としている。加えて筆者は、人と人が繋がりたいという意図や意志がやりとりの構造を支えることに焦点を当て、音楽を介して繋がり合う場を“音楽的場”と規定してきた（根津、2002）。“創造的音楽活動”は、四半世紀以上“安全・安心で、安定した枠（時間・空間）”の中で実施され、その枠の中で対象者の自己実現が保障されてきた。そして、そこでの自己実現の手応えは、実践者と対象者の両者の確かな活力となり、

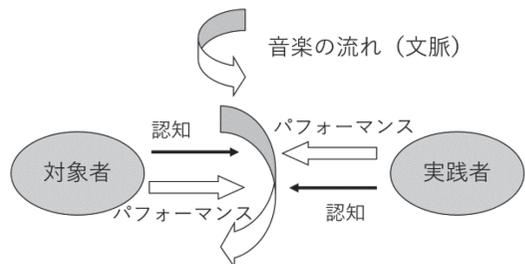


図1 やりとりの構造（根津、2002）

*ねづ ちかこ 日本女子大学

さらなる多彩な“音楽的場”を創出する原動力となっていた。実践者と対象者が同じ時間・空間で向かいあうことは暗黙的な前提条件であり、その前提条件抜きの対話や文脈の創出についての議論は全くなされてこなかった。

しかし、コロナ禍において、実践者と対象者が音や音楽を介して向かい合うという、この大前提は覆され、“創造的音楽活動”において最も重視される“身体性”“相互反応性”が奪われることになった。では、このような“安全・安心で、安定した枠（時間・空間）”が喪われた時に、やりとりの構造（図1）自体も失われるのであろうか。この構造を支えている人と人が繋がりたいという意図や意志すらも失われるのであろうか。本研究の根源的な問いは、そこにある。

私たちはこれまで何度も“いまだかつてない状況”を体験している。例えば、阪神淡路大震災や中越大地震、そして東日本大震災等においては、表現活動が受容されない時期があったことは事実であるが、徐々に人々を癒し、明日への活力を与えることに寄与したのも表現活動における意図であり、意志であったのではなからうか。

こういった危機的な状況下における人々のつながりに着目したのが渥美（2001）の「集団的即興」の概念である。渥美は、災害救護活動における即興的な振る舞いを「集団的即興ゲーム」とし、ジャズの演奏の類似から、「固定したシナリオの不在」、「既存の知識・技術の活用」、「個と全体の“間”」、「被災者との協働」、「流動するコーディネーター」の5点を挙げ、これらの活動が単なる「思いつき」「場当たり」による活動ではないことを強調している。

鈴木・渥美（2001）によれば、「集団的即興」とは、「超越的な規範が一時的にせよ消失した後の、人々が織り成す集合性が帯びる様相（p.101）」である。渥美（2008）は、即興を「ネットワークの中心になる概念」とし、以下のように述べている。

ネットワークとは、多様な要素がある時突然に「結び目」となり、次の瞬間には

その結び目がほどかれて、別の要素との「結び目」を作っていくような運動のことを指す。結び目の形成と崩壊は、臨機応変に生じる。ここにネットワークと即興との親和的な関係を見て取ることができる。（pp.208-209）

では、渥美らの言及する「集団的即興」は、コロナ禍でも適用できるのであろうか。“いまだかつてない状況”における“いまだかつてない協働”において、思いもよらない生産物や作品が創出されることはないのであろうか。本稿では、コロナ禍におけるN幼稚園との協働について概観し、渥美による5つの観点に依拠し即興的なネットワークの様相について検討する。

1-2. N幼稚園と研究者の協働

報告対象とする連携活動は、2020年12月18日に開催予定であったN幼稚園のお楽しみ会（クリスマス会）である。2017年度以降、学生による演奏会の企画などプロジェクト型のPBL教育（Project Based Learning）の一環としてN幼稚園と協働している。特に、筆者らとN幼稚園との協働の分岐点となったのは、担任代替となった園長が「子ども会」の指導をすることになった2018年度末におけるアクションリサーチ的な協働である。その際には、「遊びを通して、自己実現が図れる」、「人とのかかわりを通して、規範意識の芽生えを培う」、「安心して自分らしさを発揮し、のびのびと生活できる」という園の目標や指導計画に基づいた「子ども会（発表会）」に対する短期介入が求められた。全ての園児が全ての楽器に触れる体験を保障するという“創造的音楽活動”を創出するために、研究的視点に則った楽曲のアレンジ、合奏支援方法の提示、楽器の提供等を行った。このように短期間で合奏をまとめなければならない場合には、合奏の出来栄や効率的で円滑な指導を優先するために、指導者が先導し合奏の配置や担当楽器を決定しがちである。しかし、担任不在という緊迫した状態にもかかわらず特別支援が必要な複数の園児も含めて、N幼稚園では「楽器は自分で決める」「すべての楽器を体験する」ことを

保証・保障したことから、根津（2020）は、集团的活動システム（Engeström、1987）において「交換（三角形左下）」にN幼稚園の合奏支援における園児の体験・学びの特徴があることを明らかにした（p.13）。当然ながらN幼稚園における“音楽的場”は混沌とし、騒然とした状態が続いたが、コミュニティに「年長の演奏をお客さんに聴いてもらいたい」という宛名や意図が発生し、園児から「そのためには自分達が静かにしなくてはならない」というルールが発生し、教職員から「沈黙や間を大切にするための支援の在り方」という新たな観点が生まれた。こういったコミュニティにおける自発的なルールの発生体験は、「分配（右下三角形）」を変容させ、園の目標でもある「規範意識の芽生え」につながっていったと考えることができる。

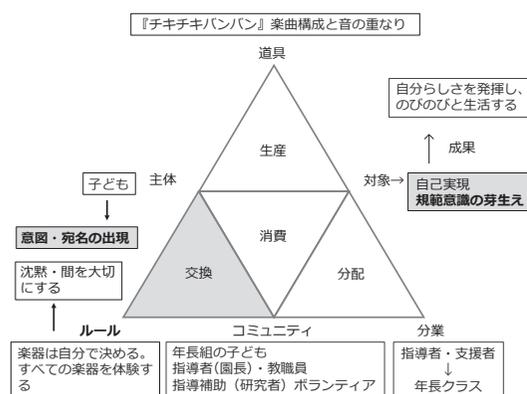


図2 N幼稚園の学び・体験（根津、2020を一部改変）

1-3. 学生と園児の相互反応性

2020年度お楽しみ会（クリスマス会）は、2019年度のプログラムの省察を基盤としているため、ここでは例年リクエストとして挙げられる『あわてんぼうのサンタクロース』を事例とし、PBL教育として何を課題（problem）とし、どのような企画（project）を推進していたのかを概観する。

吉岡治作詞、小林亜星作曲の『あわてんぼうのサンタクロース』は、1967年に発表されて以来、誰もが知っているクリスマス・ソングの定番として幅広い世代に歌い継がれている。へ長調10小節からなる当該曲は、「来る」「落ちる」「踊る」「帰る」というサンタクロースの行動や移動がイメージし易いだけでなく、「あわてんぼうの サンタクロース クリスマスマえに やってきた」という共通する“歌い出し”に対して、サンタクロースの行動に対応する多彩なおノマトペが用いられていることから（表1）、長い曲であるにもかかわらず就学前の幼児にとっても集中が続く、魅力的な楽曲である。

曲の前半で擬音語（リンリンリン、ドンドン）が用いられ、擬態語（チャチャチャ、シャランラン）への変化を経て、5番では1番から4番のすべてのおノマトペが組み合わされていることも魅力の一つである。もちろん当該曲のストーリー全体を理解し、5番の総合的なおノマトペを表現することができるかどうかは

表1 楽曲の構造

	3-4小節	5-6小節	7-8小節	9-10小節
1	クリスマスまえに やってきた	いそいで リンリンリン	ならしておくれよ かねを	リンリンリン リンリンリン リンリンリン
2	えんとつ のぞいて おこちた	あいたた ドンドン	まっくろくろけのおかお	ドンドン ドンドン ドンドン
3	しかたがないから おどったよ	たのしく チャチャチャ	みんなもおどろよ ほくと	チャチャチャ チャチャチャ チャチャチャ
4	もいちどくるよと かえってく	さよなら シャランラン	タンプリンならして きえた	シャランラン シャランラン シャランラン
5	ゆかいなおひげの おじいさん	リンリンリンチャチャチャ ドンドンシャランラン	わすれちゃだめだよ おもちゃ	シャランリン チャチャチャ ドンシャラン

発達年齢によって異なる。しかし、あらゆる発達段階において「クリスマス前」という季節感やテンポ感を共有することができる楽曲であるため、半世紀にわたって世代を超えて親しまれている。

岩田(2019)に依拠するならば、当該曲には身体が他者と同調してリズムを共有することができる「ノリの共有」が内在していると考えることができる。岩田は、「近代的時間概念に還元されてしまいがちなリズムという言葉の代わりにノリという言葉を用い(p.95)、現代の乳幼児の生活の危機は、主体形成の基盤となる養育者との間の「ノリ(リズム)」の喪失という危機であるとし、ノリの復権のために大人がどのように援助すべきかを論じている。また、岩田(2008)では、逸脱児がノリにノルことのできるための教師力を、「子どもたちのノリの共有のありようを読み取りながら、ノリの明確な文化財(教材)を身体的パフォーマンスによって提示し続けること(p.12)」と規定している。

年末になると子ども達と当該曲の「ノリ」を共有するための多様な実践が展開されている。例えば、一連のオノマトベに対して鈴、太鼓、カスタネット、トライアングルなどの簡易打楽器を伴った合奏を取り入れるなどの事例が図書やテキストとして市販されているだけではなく、近年では動画としても多数配信・公開されている。

一方、「創造的音楽活動」における“身体性”や“相互反応性”は、「ノリ」ではなく、イメージの共有や沈黙や間の創出のためのものである。例えば、2019年度には、MC(master of ceremony)と園児の対話を重視した構成とし、ペープ

サートを用いた実践を行った。以下、学生、参加者の省察をまとめた2つのエピソードを示す。

【エピソードA】

ハンドベルによる『ジングルベル』の演奏後に舞台裏で鈴を鳴らし、「あれ、この音はなんだっけ?」「サンタさんが来る音だ!」と、劇仕立てでMCが語りかけるなどの工夫を試みた。「サンタさんの音が聞こえてきたよ」という問いかけに対し、子どもたちは、「すず!!」、「後ろですず鳴らしてる」と目の前の状況を伝え、「まだクリスマスまでには時間があるのに、どうしたんだろう?」というMCに対し、「次はあわてんぼうのサンタクロースだあ!」と経験的にプログラムの順番を言い当てるなどの現実的反応が見られた。①

【エピソードB】

1番と2番を連続して演奏した後に一旦音楽を止め、子ども達の集中を切らせないために、「サンタさんったらおっちょこちょいだなあ、クリスマスの前に来ちゃうなんて!でもみんな、少し早めにサンタさんに会えてラッキーだったね。クリスマスの日にも会えるといいね。」とMCを入れると、これに対して、「サンタの服じゃな〜い」とMC役の学生がサンタクロースの服装をしていないことを挙げ否定しつつも、「良い子かどうか、いつも見てるよ」と言われると「夜も?」と尋ねるなど、「半分信じていて半分信じていない」「ファンタジーと現実の

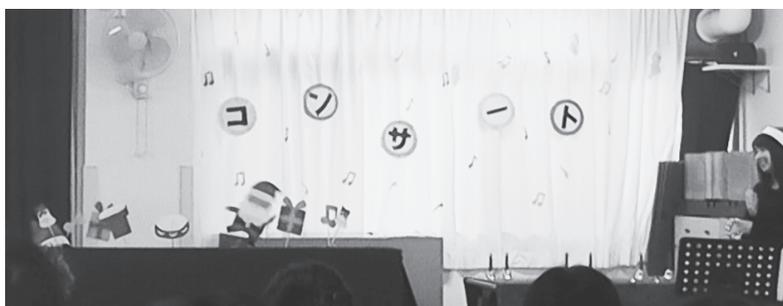


写真1 ペープサートを用いた『あわてんぼうのサンタクロース』(2019.12.23)

混在したやりとり」が見られた。②

富田（2009）は、大人が扮装したサンタ（直接的経験）と夜中に寝室にプレゼントを届けてくれるサンタ（間接的経験）について、6歳児は前者を偽物とし、後者を本物とする傾向にあることを報告している。また、保育園やデパート、テレビなどサンタクロースのリアリティ（実在感）は、その思い描く像によって異なっていると述べている。

エピソードA下線部①では、次の曲が『あわてんぼうのサンタクロース』であることに関心を持っているものの、サンタクロースの到来を象徴するイメージとして「その音=はず」を共有することはできなかった。しかし、エピソードB下線部②では、MCの学生がサンタクロースでないことを指摘しつつも、MCが「ここにはいないサンタクロース」に言及すると、「夜も（見ている）？」という反応が見られた。また、2番の後に一旦音楽を止めてMCを入れたことにより、園児は情動的にはならずにはパーサートの動きに合わせてピアノを演奏している“相互反応性（横矢印）”には気づいていたが、『あわてんぼうのサンタクロース』の後半の「踊る」「帰る」については、MCを入れたことにより曖昧になってしまった。つまり、図1の縦矢印である“音楽の流れ（文脈）”を共有するには、さらにプログラム構成の改善が必要であることが明らかになった。

以上から、情動を軸とした“身体性”や「ノリ」を前面に打ち出す“音楽的場”ではなく、“音楽の流れ（文脈）”を共有することをPBLのP（problem）とした。それは、演奏者（学生）が園児や家族、教職員に向けて音楽をプレゼントするという宛名のある“音楽的場”へ移行したことを意味することになる。

2-1. プレゼントの中身の変容

従前のお楽しみ会（クリスマス会）の構造に2020年度の参加者予定者（幼稚園関係者、学生グループ、ゲスト）を当てはめたものを図3に示す。矢印は、演奏者同士、演奏者と参加者の“相互反応性”を表している。

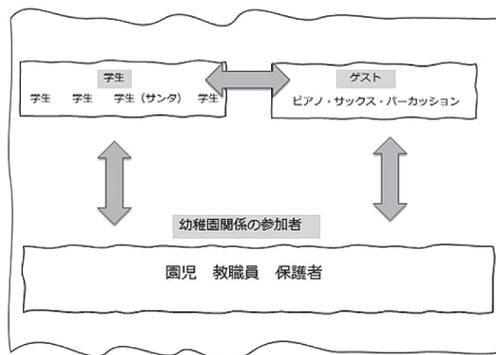


図3 N幼稚園における“音楽的場”（2017-2019）

筆者と園長のメールのやり取りにあるように（表2）、コロナ禍の10月下旬から11月下旬にかけて、4名の学生グループと3名による演奏グループが30分のプログラムの企画を進めていた。

山崎ら（2021）の東京都内の教育実習調査によれば、幼稚園で55.1%、保育所で44.8%が歌活動に関して「同じ方向で歌う」などの対策をしているものの、保育所の3分の1が歌活動を減らすなどの対応をしている。しかし、約40%の幼稚園が「マスクを着けたまま歌う」などの対応策をとりながら歌う活動を保障している。緊急事態宣言について政府による検討が進められていた時期であったが、N幼稚園でも年間指導計画に基づき、園児の表現活動を保証・保障することを企図した連携を目指していた（④）。あわせて1-3で述べたプログラムは感染状況に合わせて修正を余儀なくされることになった（④網掛け部分）。

2020年11月30日（表2④）から12月15日（表3）にかけて『あわてんぼうのサンタクロース』に内在するファンタジーやストーリーの共有を目指し、「サンタクロースがプレゼントを届ける」という構成による準備を進めた。飛沫感染防止の意味合いも兼ね、園児からのリクエストである『紅蓮華』『勇気100%』は、演奏グループ（サクソ・ピアノ・パーカッション）による録画とし、「サンタクロース（大学生）がプレゼント（リクエスト曲の録画）をクリスマス会に届け、一緒にプレゼントを開ける」という“音楽的場”のシナリオを考案した（図4）。

表2 園長とのやりとり

	日時	宛先	本文
①	10月23日 16:22	園長→ 根津	過日は、幼稚園へいらしていただきありがとうございました。さて、お願いです。12月18日(金)にお楽しみ会を行います。つきましては、昨年もお願したように、12月18日(金) 11:00~11:30 (10:10~ ホールリハーサル可能) 幼児向けに、クリスマスソング始め、何か演奏をお願いできますでしょうか? ご検討をいただければ幸いです。よろしくお願いたします。
②	10月29日 9:06	根津→ 園長	お声をかけていただき、ありがとうございます。ぜひ、お願いします!!
③	10月30日 11:15	園長→ 根津	ご快諾ありがとうございます。感謝です。こどもたちも教員も楽しみです。日にちが近くなりましたら、また、ご連絡をいたします。よろしくお願いたします。
④	11月30日 11:30	根津→ 園長	お世話になっています。音楽会ですが、 ◆ 所定の時間内のプログラムを編集して動画にする。 ◆ あわてんぼうのサンタクロース、ジングルベルなどは、子どもたちが映像を観ながら参加できる活動にする。もちろん、3密にならないように。ということでしょうか。TV かスクリーンに投影していただければ、と思います。ご検討くださいますと幸いです。

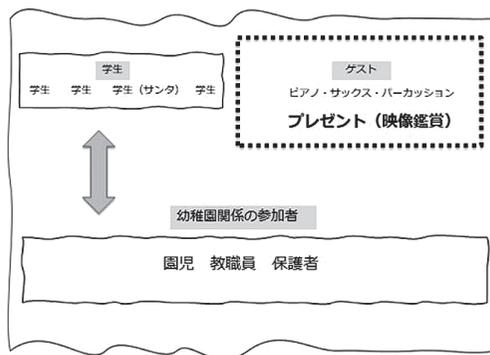


図4 プレゼントを渡すことを強調した音楽の場

表3 園長とのやりとり

⑤	12月15日 13:35	根津→ 園長	例年以上に走り回っている師走です。先生もお忙しいことと存じます。プログラム案を記します。 【A】 ウィ ウィッシュ ア メリークリスマス (ギター&グロッケン) あわてんぼうのサンタクロース (ボディパーカッション) 【B】 紅蓮華 勇気100% 【C】 ジングルベル (ハンドベル) お正月 (トーンチャイム) 以下、質問です。 ◆ 会場は、昨年と同様にカーテンでしきりますか? ◆ Bですが、テレビかパソコンを使用したいのですが、テレビはありますか? ◆ 子ども達の人数は何人でしょうか。学生4名とうかがいます。
---	-----------------	-----------	---

表4 園長とのやりとり

⑥	12月15日 17:09	園長→ 根津	素敵なご提案をありがとうございます。楽しみにしておりました。しかしながら、、、事情により集会活動を中止いたすことになりました。本当に、申し訳ない上に、残念です。もしよろしければ、Bの部分でも、、、何か、見ることができれば、、、また、相談させていただきます。12月18日のご来園は、見合わせていただきます。大変、申し訳ありません。が、今後ともよろしくお願いいたします。
---	-----------------	-----------	---

しかし、3日前に開催中止の連絡が届いた（表4⑥）。

園長のメールの「もしよろしければBの部分でも、、、何か見ることができれば、、、（表4⑥）」を受け、学生グループの演奏とクリスマスプレゼント（ゲストの録画）を合わせ、プログラム全体を「クリスマスプレゼント」としてファイル送信するという新たなP（project）が誕生した。新たな形態は、すべてのプログラム全体を録画して、その映像をプレゼントするというものである。一部の楽曲は、動画を観ながらの表現は可能であるが、基本的には園児や保護者は映像（＝プレゼント）を鑑賞することになる。これは、演奏グループと園児との“身体性”“相互反応性”の全てを手放す決断をしたこと、および対面せずにお楽しみ会（クリスマス会）を共有することを意味している。

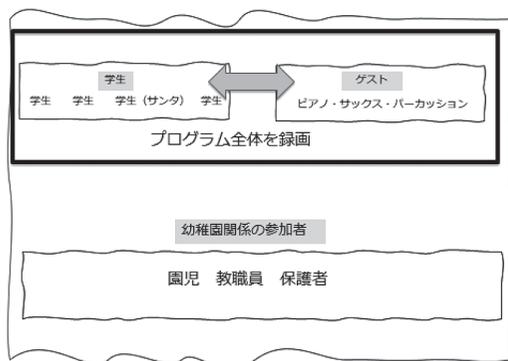


図5 新たなクリスマス会の構造

2-2. 「しかたがないからおどったよ」

録画は、12月17日と18日に入構制限下の教室の片隅で行った。ここでは、『あわてんぼうのサンタクロース』における“相互反応性”について報告する。コロナ禍で過ごしている園児にとって、画面を介しての手遊びやボディーパーカッションには抵抗がないこと、表1にあるように、園児にとってイメージしやすい擬音語が用いられていることから、1番と2番は手遊びを提示した（写真2）。

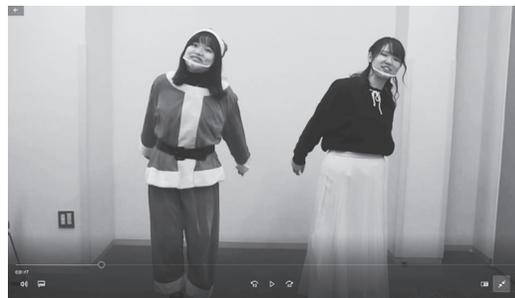


写真2 手遊びの提示

3番と4番は、“音楽の流れ（文脈）”のつなぎ方についてかねてから課題になっていた部分である。そもそも、藤野ら（2019）が職場の休憩室での業務に関する雑談例として報告しているように、当該楽曲の3番と4番の歌詞は指導者間でも曖昧である。（表5. 網掛けは筆者による）。

表5 ストーリーの曖昧さ（藤野ら、2019より抜粋）

A1：なあれあわてんぼうのサンタクロースってさ、煙突覗いて落っこちるやろ。え、う。1番が。
A2：（あわてんぼうのサンタクロースを口ずさみ始める）
A1：あ、そうや。クリスマス前や、2番が煙突で。ほんで、えっとしかたがないから踊ったよが3番？
A2：3番。
A1：4番は？
A2：4番は。
A1：4番がいつも分からへん。で、ほよほよほよほよ（ごまかす感じ）でみかんでも終わって、みんな分からへんねん。
A2：（歌詞を口ずさむ）あわてんぼうのサンタクロース、クリスマスまえにやってきた。いそいでリンリンリンや、リンリンリン。で、2番は、あいたたドンドンドン、で、一緒に踊るチャチャチャ。で、あわてんぼうのサンタ、あ、最後はあわてんぼうのサンタクロース、もいちどくるよとかえったよ、さよなら／シャランラン、さよならシャランラン
A1：あー、知らなかった、もいちどくる（以下略）

（藤野ら、p.40）

3番と4番については、前述したように「ノリ」を重視した場合には、“踊る”ことが優先され“音楽場”は情動的になる危険性を孕んでいる。また、歌詞が曖昧である以上、小物楽器を用いても“音楽な流れ（文脈）”を共有することは難しい。

そこで、「しかたがないから おどったよ みんなもおどろよ ほくと」からは、バレエの振

り付けで踊り、「踊りのイメージの共有」を目指すこととした。通常、前奏はサンタクロースがやってくるイメージを膨らませるかのようにより、スタカートで軽やかに演奏される。♩ = 100～126の軽快なテンポ設定の楽譜が多いが、小型キーボードを用い、バレエの動きに合わせて♩ = 80前後のテンポによる即興を行った。

表6 3番の振り付け

3番 歌詞・pas (ステップ)	動きの解説	歌詞との繋がりや構成
あわてんぼうの／サンタクロース Echappé relevé × 2	Echappé relevé：脚を横に開いたり閉じたりする	小さい動きから始める 手は開いて可愛らしさを出した
しかたがないから／おどったよ Pas de bourrée dessous × 2	Pas de bourrée dessous：身体の方 方向を変えながら足を踏む	身体の方 方向を変える動きを入れるこ とで徐々に動きを大きくした
たのしく／チャチャチャ Changement de pied / Spring point × 3 たのしく／チャチャチャ Changement de pied / Spring point × 3	Changement de pied：小さくジ ャンプし、身体の方 方向を変える Spring point：片脚ずつ前に出 し、交互に取り換える	跳ねること で「楽しい」様子を表現 ① 「チャチャチャ」に合 わせてリズム カルに足を動かす
みんなで／おどろよ／ほくと Posé / Detourné / マイム ^{*注} 「踊る」	Posé：一歩前に出る Detourné：その場で3/4回 転して身体の方 方向を変える マイム「踊る」：頭上 で腕を回し、開く	「踊ろう」の歌詞の 意味に合わせて マイムをし、「踊る」 を表現②
チャチャチャ／チャチャチャ／チャチャ チャ Préparation dégagée tours × 3	Préparation dégagée tours：片脚 を軸に回転し、移動する	その場で動く振りが多 かったので、 交差して場所を交代

バレエの動きの考案に関しては、跳ねることで「楽しい」様子を表現したり（表6下線①）、頭上で腕を回し開くマイムの動きで「踊る」を表現する（表6下線②）など、歌詞の解釈に焦点を当てた振り付けを検討した。



写真3 「チャチャチャ チャチャチャ チャチャチャ」

4番「もいちどくるよとかえってく さよなら シャラランラン タンプリンならしてきえた」については、「かえってく」の意味や（表7下線③）や「シャラランラン」のイメージ（下線④）を象徴する動きを取り入れ、最後はクリスマスに因んだ作品として有名な『くるみわり人形』と結びつけたポーズで静かに終わる流れで一旦終止した。

以上、1番と2番では手遊び、3番と4番ではバレエの鑑賞という質の異なる音楽的経験ができるように『あわてんぼうのサンタクロース』における“音楽的な流れ（文脈）”を再構成した。

表7 4番の振り付け

4番 歌詞・pas（ステップ）	動きの解説	歌詞との繋がりや構成
あわてんぼうの／サンタクロース Battments tendus devant / Battements tendus derriére	Battments tendus devant：片脚を前に出す Battements tendus derriére：片脚を後ろに出す	メロディの流れに合わせて、ゆったりと
もいちどくるよ／かえってく Glissade derriére Assemblé over Entrechat quatre × 2セット	Glissade derriére：軽やかに横に移動する Assemblé over：横に放り投げた片脚を空中で集めるジャンプ Entrechat quatre：空中で脚を2回取り替えるジャンプ	雰囲気を変えて、アクティブに交差して移動するステップを2セット行い、元の場所に戻ってくることで「かえってく」を表現③
さよなら／シャラランラン Battments tendus devant / Ronds de jambe par terre さよなら／シャラランラン Temps lié / 5th	Battments tendus devant：片脚を前に出す Ronds de jambe par terre：軸でない方の足を、半円を描くように前から後ろまで回す Temps lié：軸足から、後ろに出ている脚へ体重移動する 5th：足を交差させて立つバレエの足のポジション	雰囲気を変えてゆったり、しっとり 脚を回す動きと一緒に腕の動きを加えることで「シャラランラン」のおしゃれな響きを表現④
タンプリン／ならして／きえた Battments tendus à la seconde / 4th / Pirouette en dehors	Battments tendus à la seconde：片脚を横に出す 4th：前後に足を開いて立つバレエの足のポジション Pirouette en dehors：片脚を軸にその場で回転する	見せ場
シャラランラン／シャラランラン ／シャラランラン 最後のポーズ	最後のポーズ：座って片手を肩に	クラシックバレエではクリスマスの代名詞と言われる作品である「くるみ割り人形」より「葦笛の踊り」をイメージしたポーズにした⑤

5番は、キーボードのテンポを♩ = 100に上げ、教室の外から飛び込んで登場したサンタクロースが快活に踊りながら歌った後に、「今日は、みんなにクリスマスプレゼントがあるよ。何かな～」とズームアップするとリクエスト曲(=ゲストの演奏)が流れるという構成とした。



写真4 「プレゼントは何かな～」



写真5 プレゼント=リクエスト曲

3-1. 踊らない『あわてんぼうのサンタクロース』

こうして、プログラム構成を2日間で修正し、予定されていた12月18日に送信したプレゼント(動画)は、以下のようにN幼稚園で共有された。お楽しみ会(クリスマス会)における直接的な“身体性”“相互反応性”を一切手放し、動画をプレゼントすることにした結果、動画内で繰り広げられる“身体性”“相互反応性”が、複数の場所で再生されるという新たな“音楽的場”を創出することができた。

表8 2020年度N幼稚園のお楽しみ会(クリスマス会)

ねらい	季節の音楽に親しむ。 親しみのある曲を聴きながら、様々な楽器の演奏や表現方法に興味・関心をもつ。
実施日	2020年12月24日(木)
時間	4歳児クラス 10:30～10:55(保育室) 5歳児クラス 11:00～11:25(ホール)
方法	親子 11:45～(園庭) 幼児は、学級で一斉、親子は降園時に希望者のみ、立ち見。

園長による報告および教職員による省察記録から、園児は鑑賞(下線①②)や口ずさむ(下線③⑤)という音楽的経験を深めることができたことが示唆されている。

頂きました映像は、根津先生から、よい子の皆にクリスマスプレゼントが届いたと紹介して各クラスで鑑賞しました①。様々な楽器、バレエやボディーパーカッションなどを楽しみ②、そして、鬼滅の刀、勇気100%では、口ずさみ、アンコール!!!③ 本当にありがとうございました。職員もおお喜びです。来年も、まだまだ油断ができない状況ですが、園児たちと一緒に、健康に十分に気を付け過ぎて参りたいと思います。

教職員の省察にも、映像を鑑賞する園児の様子が描かれている(④)。

大型テレビの画面から流れてくる音色や、学生方の様子を静かに、興味をもって自席で鑑賞していました④。生の演奏とは音や雰囲気の違いなどがあると思いますが、子どもたちは一緒に口ずさんだり、体をリズムに合わせて揺らしたりして音楽に親しんでいました⑤。



写真6 踊らない『あわてんぼうのサンタクロース』

3-2. 新たな材としての可能性

お楽しみ会中止を受けてから2日間でプログラムを再構成し、10分程度の動画をメールで送信するという“いまだかつてない協働”となったが、その結果プレゼントである動画についての材（視聴教材）としての可能性を見出すことができたのではないだろうか。

ビデオ内容に関して、教職員からは、下記のような感想が提出されている（下線は筆者による）。

季節（クリスマス、お正月）の曲、人気のあるアニメの音楽と、楽器や音色を紹介しながらの内容がとても良かったです。保護者の方にも、ピロティで見てもらうなどして繰り返し視聴させていただき、多くの親子がコンサートを子どもから話を聞きながら楽しんでいました。

コロナ禍で表現活動は奪われてしまったが、鑑賞活動の可能性を見出すことができたことになる。具体的には、動画再生によって鑑賞者の衛生や安全が担保されるというだけでなく、その内容を他者と交流できるという利点が明らかになった。このことについて、N幼稚園では、①繰り返し見られる、②途中で止めたり、巻き戻したりするなどして、教育活動に取り入れやすい、③記録媒体のセキュリティを把握し、どこでも映し出せるようにすれば、未就園児や親

子イベントなど様々な行事に取り入れていくことにも期待できる、という3点を可能性としてまとめている。

3-3. 集団的即興ゲーム

以上から、渥美が言及するように、危機的な状況下と同様にコロナ禍における協働も単なる「思いつき」や「場当たり」による活動ではないことが明らかになった。もちろん、新型コロナウイルスの感染拡大と自然災害とは異なるものの、N幼稚園との協働は渥美の言及する「被災者との協働」と同種であったと言っても過言ではないだろう。渥美（2008）は、被災地でのボランティア活動の課題として「提供して欲しいこと（ニーズ）と提供できること（シーズ）のマッチング」を挙げている（p.216）。

当該協働において、突然「結び目」がほどかれて、別の要素との「結び目」を作ったことを象徴しているのは、限定された時間と状況の中で、キーボードによる即興でバレエを踊るというプログラムを創出したことであろう。他の楽器を準備する時間もない中で、2名のバレエ経験者が、「しかたがないからおどった」という流れこそ、提供できること（シーズ）であったといえる。園児は、いつものように踊ることはできなかったが、画面で踊っているバレエを鑑賞し、新たな体験をすることができたのではないだろうか。

渥美は、「被災者との協働」について、以下のように述べている（下線は筆者による）。

被災者とボランティアとが一緒になって、協働でニーズを構築していくのだと考えたい。ジャズもその演奏はステージの上だけで行われるのではない。聴衆とのえもいわれぬ交流がいいジャズを生んだり、ジャズを殺してしまったたりするという話はよく聞かれることである。その際、個々のプレーヤーや一人一人の聴衆の内面に“聴きたい音楽”なるものを措定するのではなく、両者がその時、その場で協働して音楽を奏でていると考える訳である（p.217）

サンタクロースがバレエを踊るというシナリオは、『あわてんぼうのサンタクロース』のストーリーから逸脱しているかもしれない。しかし、「踊る」「もいちど来る」「さよなら」という歌詞の意味内容を象徴する振り付けをし、テンポを落として表現した映像を鑑賞することによって園児は“いまだかつてない表現”を経験したのではないかと考える。例えば、園児が3番や4番を歌ったり、踊ったりしていなくても、「協働して音楽を奏でている」ことを可能にしたのではないだろうか。

バレエの振り付け場面では、大学教員から学生(バレリーナ)にコーディネーターが移行し、筆者は2名の学生によるバレエの振り付けに対してキーボードで即興を行う役割を担っていた。これは、「流動するコーディネーター」について「セッションが始まれば、それぞれのプレイヤーが表に出たり、下支えを行ったりしながら演奏が進行する (p.217)」という渥美の見解と一致するものである。

ところで、コロナ禍という未曾有の状況においては、災害時と同様に「固定したシナリオの不在」が協働を困難にするものである。このことについて渥美は、ジャズの比喩に託し、曲調やコード進行が決まっているものの、演奏においては事細かに規定されている訳ではなく、演奏者の即興に委ねられている点を強調している。

当該協働においては、3種のシナリオが存在していたと考える。まず、N幼稚園と筆者らの協働である。そして、次に、お楽しみ会(クリスマス会)全体のプログラム構成であり、第3は、『あわてんぼうのサンタクロース』の“音楽の流れ(文脈)”である。それらは、入れ子状態になっており、いわば3つの様相を呈していたと考えることができる。いずれの相にも固定されたシナリオが不在であったが、結果的に、第3の相の質的変換により新たな“音楽的場”を創出し、材(動画)の可能性を見出すことができたのは、「既存の知識・技術の活用」や「個と全体の“間”」について、個々の意図や意志が尊重される基盤があったからではないかと考える。渥美(2008)は、それを「その場のプレイヤーの音に臨機応変に応答しながら、音楽を紡ぎだ

していく (p.214)」と表現している。そして、プレイヤーには、「自他の活動を理解しながら、即興が行われている場全体をも同時に理解すること (p.215)」が要求されるとしている。

その即興について渥美(2008)は、以下のよう

多様な参加者が、それぞれに習得してきた技術・知識を前提として、現場の多様な声に臨機応変に応答しながら、それらをいかに結び合わせていくかということ——ネットワークワーキング——が問われる。(p.214)

コロナ禍におけるN幼稚園との協働において“安全・安心で、安定した枠(時間・空間)”が喪われた時であっても、人と人が繋がりたいという意図や意志はより一層自覚されることを確認することができた。そして、宛名をもった表現の意図や意志こそが「ネットワークワーキングと即興の親和的な関係」を支えることが示唆された。

【引用・参考文献】

- 渥美公秀(2008). 「即興としての災害支援」『ネットワーク結び合う人間活動の創造へ』第Ⅱ部第5章 山住勝弘/ユーリア・エンゲストローム編. 新曜社. pp.207-230
- 千田亮子・白井裕美子・藤井栄子・太田一貴・根津知佳子(1992). 「即興活動における音楽的相互反応性に関する一考察(1) — 感覚運動的段階の太鼓活動の指導 —」『日本特殊教育学会第30回発表論文集』 pp.762-763
- Engeström, Y. (1987). *Learning by expanding: An Activity-Theoretical Approach to Developmental Research*. Helsinki: Orienta - Konsultit. 山住勝広ほか訳(2009). 『拡張による学習 — 活動理論からのアプローチ』新曜社.
- 藤野秀則・浦山大樹・北村尊義・石井裕剛・下田宏(2019). 「職場の休憩室での業務に関する雑談の誘発方法の提案」『ヒューマンインターフェース学会論文誌』 Vol. No.2 pp.29-45
- 岩田遵子(2008). 「逸脱児は集団の音楽活動に参加するようになるための教師力とは何か——ノリを読み取り、

- ノリを喚起する教師力—」『音楽教育実践ジャーナル』vol.5 no.2.3. pp.12-18
- 岩田遵子（2010）.「現代における乳幼児の生活の危機に大人はどのように対処すべきか—子どもの生み出す文化を育むために—」『教育方法39子どもの生活現実にとりくむ教育方法』日本教育方法学会編. 図書文化. pp.82-97
- 長崎勤・小山はるみ・八重田美衣（1990）.「認知・語用論的アプローチによる言語指導の試み(Ⅳ)—ダウン症幼児に対する太鼓即興の音楽活動による共同行為の形成—」『特殊教育研究施設報告』第39号 pp.43-54
- 根津知佳子（2002）.「音楽的経験に内在する〈ドラマ性〉」『日本芸術療法学会誌』Vol.32 No.2 pp.68-76
- 根津知佳子（2020）.「幼年期の音楽的経験に関する研究—合奏支援を中心に—」『日本女子大学家政学部紀要』第67号 pp.7-16
- 鈴木勇・渥美公秀（2001）.「『集団的即興』の概念からみた災害救援に関する研究—アメリカ合衆国ノースリッジ地震における災害ボランティア組織の事例—」『ボランティア学研究』2. pp.61-86
- 山崎唯・石川響希・中尾光ら（2021）.「保育現場における新型コロナウイルス感染症対策の現状と保育課題」『第34回学生研究発表会発表要旨集—全国保育士養成協議会関東ブロック協議会—』 pp.41-42

